

桜蔭俳話会 通信句会(第一一七回 平成二十七年春)
高得点句 自句自解

八点

④ 山焼きや呼びおぶてゐる人の影

柏尾のり子

この五年ほど、北九州と横浜の半々の生活を送っています。北九州市には平尾台という大きなカルスト台地があり、毎年、春に行われる野焼きは風物詩となつていきます。ニュースで見ると、煙に隔てられ、声をかけあつて安全を確かめつつ作業をする様子は、危険なのでしようが、幻想的でもあります。その感じを句にしてみました。なお、今年は事前に山火事が起きてしまい心配されましたが、山焼きの予定地は無事焼け残り、改めて焼いたというオチがついています。

② 浄瑠璃の肩で泣きゐる春障子

恩田 才美

哀しみを美に昇華できる場が人形浄瑠璃にあると思つています。人形、遣い手、語り手は勿論のこと、観客もが、あの小さな空間で一体となり、息のぴったり合う一瞬が忘れられません。人形の頭や指の悲しみの表現が、やがて肩のわずかな変化へと移行していく様を見逃しません。

芽吹きたる火の山石の仏かな

増田 守

日本列島はその形成過程に由来し、いつまでも地震や噴火活動に付き纏われる宿命にある。その火の山も中腹部や山頂部付近の植生は、既に芽吹きの時期を迎えている。多くの命を呑み込んだ火の山は、思まわしい火口の在処を教えるように水蒸気を静かに上げている。火山の活動サイクルは人間のライフサイクルと比べて遙に長い。まさに忘れた頃に噴火災害に遭遇するのであるが、石の仏に象徴される過去の慰霊碑は、今の人間活動を危なかしげに見つめてい

野の花に混ざりて染まず黄水仙

藤崎安紀子

散歩の途中、雑草の中に黄水仙が一本混ざつて咲いていました。特に目立つ様ではなく、他の名も知らぬ花とマツチしているように見えました。よく見ると上品で凜とした風格を失っていない黄水仙。自分もかくありたいものだと思ひます。

七点

戦死なき七十年や昭和の日

佐渡谷秀一

詩情、余情を伴わない句を詠むのは気の進まないことではあるが、七十年かけて昔々と築いてきた不戦の誓いが崩れようとしている現況を思つくと、つい、無機質な言葉をいつか書いてしまう。その通りだとしか述べられない句は哀しい。

六点

④ ひとまはり膨らむ山や木の芽晴れ

藤本 友子

芽吹きの際は、生命の動き出すのを感じられて、好きな季節です。今まで枯色の寂しい山が、色が付き始め、その緑色がだんだん濃くなって、山自体が膨らんだように思えるのです。

⑤ ふうらいや少年宇宙にあらがる

藤本 友子

最近、将来の夢に「宇宙飛行士」と言う小学生が結構いるとか。昔では考えられない職種だ。ある日、孫をブランコで遊ばせている時、高く滑るほどに、喜々として気持ちよさをそうにしていのを見て、「こんな経験からも、宇宙へのあこがれが生まれるのかな」と、句にしてみました。

五点

③ 羊水の中にあしごと花明り

桜井 幸枝

陽の陰りはじめた頃、駅近く桜の木の下で、偶然友人と出会った。お互いに花を見上げることしばしば、「桜の花色つて淋しいのよね」と彼女の声……。私はあわつと花の中に浮き上がった様な感覚にとらわれ言葉を失った。その美しさ、温かみと淋しみと、その中に漂っている様な心持、何とも表現し難い。あとで何とかその感覚をつかめたのが、「羊水」であった。

② 桜東風大樹の下に椅子二つ

辻 幸子

三月中頃、いつものように公園の前を通り桜の木を見ると、その下におかれた椅子が「花が咲いたらこの椅子に座って」と、言っているかのようにみえました。桜が咲くのを待つ気持ちを込めてその光景を詠みました。

春野蹴り。パラグライダー声高く

恩田 才美

山や野によく出かけます。丹沢や熱海等の低山を歩いていると、パラグライダーの基地に出会うことがあります。空中の彼等と声を掛け合い浮遊感を共にしたこともありました。

初がつお売場の声の跳ねてをり

荒木ツル子

近くのスーパーマーケットに行った時、「初がつおだよ……」の威勢の良い声につられ近づいて行きました。大きな俎の上には、まるまると太ったかつおが今にも飛出そうに光っていました。

四点

うたた寝の羅漢も在はす花のころ

藤崎安紀子

川越の喜多院の五百羅漢を見に行った時の句です。どの羅漢もとても個性的で、怒ったり、笑ったり、泣き顔だったり……。その中で一番気に入ったのが、のどかなお顔でのおんぴり居眠りをしているような羅漢様。春の日差しがあたたかく桜の咲く頃でした。